

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530574

研究課題名(和文) 実証研究によるコーポレート・レピュテーションの測定とマネジメント

研究課題名(英文) Measurement and Management of Corporate Reputation by Emperical Study

研究代表者

櫻井 通晴 (Sakurai, Michiharu)

専修大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：30083596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)： 研究計画で、3つの研究を約束した。第1は、レピュテーションの理論研究の一段の推進、第2は、若手研究者との実証研究の推進、第3は、海外への情報発信である。第1については、コーポレート・ガバナンス、レピュテーション・マネジメント、管理会計からみたレピュテーション、ソーシャルメディア、財務業績への影響という面から、論文だけでなく2回の学会で発表した。第2について、授業期間中は毎週「管理会計研究会」で若手を鍛え・鍛えられたとともに、海外への発信を予定通り実施した。第3は、科研費が未確定であった2012年度を除き、2013年と2014年に若手研究者とともに海外で発表した。

研究成果の概要(英文)： In my Research Program, I committed three researches. The first is to promote further theoretical research. The second is to work with young researchers to stimulate their further researches. The third is to publish and present my outcome including papers and presentation to other countries.

First, I published such reputation-related papers as corporete governance, reputation management, social medea etc.and present my papers at Japan Intellectual Capital Management Association and Japan Accounting Association. Second, I attended "Management Accounting Research Study" held every week at Senshu University. I also presente our paper with young Professor and Assistant Professor. Third, I presented our papers twice: One is the presentation presented at the 2013 annual meeting of Reputation Institute held in Milan. Another is my presentation at American Accounting Association held in Atlanta in 2014.

研究分野：社会科学

キーワード： 管理会計 コーポレート・レピュテーション 企業価値 財務業績 インタングイブルズ 知的資産 ソーシャル・メディア レピュテーション・マネジメント

1. 研究開始当初の背景:

(1) 2001年、コーポレート・レピュテーションの研究に初めて取り掛かった時には、日本における本格的なレピュテーションの研究はほとんどないに等しかった。

具体的には、1990年代になって初めて雑誌『ブレーン』(1997年)でレピュテーションの特集が生まれ、5本の論文が掲載された。しかし、次の特集(1998年)では、レピュテーションは“風評”、“風説”といった面が強調され、世界標準との乖離が明白であった。2004年になって初めて、越智の論文で、世界的なレベルでの記述がみられるようになった。以上は、櫻井通晴『コーポレート・レピュテーション』(中央経済社、2005年、pp.16-17)を参照されたい。

(2) 2011年までに、櫻井は数多くの論文を含む研究成果を発表した。それには多数の論文の他、3冊の著書が含まれる。その結果、ようやく日本での研究の蓄積ができてきた。

具体的には、著書、櫻井通晴『レピュテーション・マネジメント』(中央経済社、2008年)と櫻井通晴『コーポレート・レピュテーションの測定と管理』(同文館、2011年)で欧米の理論にキャッチアップできたと思う。

(3) 以上から、本研究では、それまでは手薄であった次の3つのテーマに取り組んだ。それは、幅広い理論研究の推進、若手研究者の育成と実証研究の推進、国内と海外への情報発信を意図した研究、を行うことにしたのである。

2. 研究の目的: 本研究の目的は、日本型の企業価値観に基づいたレピュテーション・マネジメントの提案を行うことにある。その目的達成のために取り組んだ課題とその成果は、次のとおりである。

(1) コーポレート・レピュテーションが及ぼす財務業績への影響

コーポレート・レピュテーションが財務業績に及ぼす影響を及ぼすかを明らかにした。その方法は、因子分析と共分散構造分析を用いた。実証分析の結果、論文とおよびこの関係を明らかにすることができた。結果の報告は、学会報告、で明らかにした。さらに、2015年の著書『管理会計 第六版』において、それらの発見事項を公表した。

(2) インタングIBLEZの測定と管理

レピュテーションは、インタングIBLEZの1つである。そこで、枠組みを拡げて、インタングIBLEZの測定と管理の研究を推進した。具体的な課題の1つはソーシャル・メディアの論文とで、2つの論文と、業績には掲載していないが、翻訳を完成させた。理論的な課題は論文とで明らかにした。その内容は、学会発表のにおいて発表した。

(3) 日本型レピュテーション指標の開発

日本型レピュテーション指標の開発に関

しては、本調査の前には、企業価値の日本型モデルとして、組織価値、社会価値、経済価値からなるものと想定していた。しかし、実証研究の結果、日本企業では顧客価値が大きな役割を果たしていることが明らかになった。その結果、レピュテーション指標の評価モデルを、組織価値、社会価値、顧客価値、経済価値に修正した。このモデルは、で明らかにし、その結果を、海外においてとで発表した。なお、その発見事項は、前掲著書においても明らかにした。なお、企業価値の構成要素に関する枠組みの大変革を実施する結果になったため、個々の指標の開発は次の研究において行なうことにした。

(4) コーポレート・レピュテーションと社会価値との関係を明らかにした。CSRのなかでも、その1つの要素であるコーポレート・ガバナンスを取り上げ、理論(論文)と実務(論文)の立場から考察した。

3. 研究の方法: 研究の方法は、3つの方法によった。1つは、文献研究を通じての理論的研究を行った。第2は、企業訪問を通じて、理論研究を補足した。第3は、プレゼンテーションを通じて、内外の研究者と実務家に情報を提供するとともに、参加者から研究方法や考え方などについて、新たな知見を得ることができた。

(1) 理論的研究についてであるが、多方面からの検討と研究を行った。1つは、IFRSとの関係で、インタングIBLEZの1つであるソフトウェアの会計基準を論文で発表した。論文では、経済モデルとの関係で、インタングIBLEZの展開を解明した。管理会計の質という側面からは、で取り扱った。管理会計の体系という面からは、との関係で研究を行った。

(2) 若手研究者との研究に関しては、計画どおり、授業のある毎週月曜日、午後から約10~14名前後で研究会を実施してきた。さらに、若手研究者とともに実証研究を行い、学会が用意してくれる企業訪問の多くに参加して新たな知見を得ることができた。

(3) 内外への情報発信は、日本国内(と)と海外(と)に情報を発信した。

4. 研究成果: 研究目的の第1に関しては、コーポレート・ガバナンス、レピュテーション・マネジメント、ソーシャル・メディア、財務業績への影響という面から、論文だけでなく2回の国内の学会で発表した。第2に関しては、授業期間中は毎週「管理会計研究会」で若手研究者を鍛えるとともに自身も研究することで、発信を予定通り実施した。第3は、科研費が未確定であった2012年度を除き、2013年と2014年に若手研究者とともに海外で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計 11 件)

櫻井通晴「インタンジブルズは知的資産と同義か，違ふとすれば何が違ふのか」『専修マネジメント・ジャーナル』白桃書房，2014，pp.13-22. 査読無し

櫻井通晴「現代の管理会計にはいかなる体系が用いられるべきか？ マネジメント・コントロール・システムを中心に」『経営学論集』第 99 号，2014 年。査読無し  
伊藤和憲・関谷浩行・櫻井通晴「コーポレート・レピュテーションによる財務業績への影響」『JAA 会計プロGRESS』査読あり No.15, 2014, pp.1-13.

櫻井通晴「経済モデル，会計基準，原価計算理論から見た『原価計算基準』の問題点」『原価計算研究』招待論文，Vol.38 No.1.，2014，pp.1-10. 査読無し

伊藤和憲・関谷浩行・櫻井通晴「コーポレート・レピュテーションと企業価値・財務業績への影響 世界から称賛される企業になることを祈念して」『会計学研究』第 40 号，2014，pp.1-31. 査読無し

櫻井通晴「ソーシャル・メディアの内部監査 戦略的レピュテーションリスク・マネジメント」『月刊 監査研究』招待論文，第 39 巻 9 号，2013，pp.1-12. 査読無し

櫻井通晴「ソーシャル・メディアの戦略的レピュテーションリスク・マネジメント」『経理研究』中央大学経理研究所，2013，No.56, pp.285-299. 査読無し

櫻井通晴「管理会計の『質』の点検・評価」『会計』招待論文，第 183 巻，第 3 号，2013 年，pp.44-58. 査読無し

櫻井通晴「オリンパス損失隠し事件の本質と将来の課題 コーポレート・ガバナンスの観点から」『専修マネジメント・ジャーナル』Vol.2, No.1, 2012, pp.35-46. 査読無し

櫻井通晴「IFRS がソフトウェア開発費の会

計処理に及ぼす影響 ソフトウェア開発費の理論的・実務的検討」『企業会計』Vol.64 No.8,2012,pp.111-117. 査読無し

櫻井通晴「コーポレート・レピュテーションと企業統治 取締役と監査役の役割との関係で」日本内部監査協会，招待論文，第 38 巻 第 7 号，2012，pp.1-9. 査読無し

[学会発表](計 4 件)

Ito, Kazunori, Hiroyuki Sekiya and Michiharu Sakurai, August 4, 2014, at AAA Annual Meeting under the title of “The Relationship between Corporate Reputation and Financial Performance -Empirical Analysis Research in Japanese Corporations, held in Atlanta. Sakurai, Michiharu and Ito Kazunori, The Impact of Corporate Reputation and Financial Performance, June 5, 2013, At The 17<sup>th</sup> International Conference on Corporate Reputation, Brand Identity and Competiveness, held by Reputation Institute,.

2012 年 12 月 1 日 日本会計研究学会 関東部会 統一論題で発表「管理会計の質の点検・検証 コーポレート・レピュテーションの視点から」神奈川大学 2012/12/1.

2012 年 8 月 29 日 知的資産経営学会発表「レピュテーション・マネジメント研究の現状と課題」東京理科大学 2012/8/29.

[図書](計 1 件)

櫻井通晴『管理会計 第六版』(同文館出版)，2015 年，pp.1-862。

[産業財産権]  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井 通晴 (Skurai Michiharu )  
専修大学・名誉教授  
研究者番号：30083596

(2) 研究分担者

伊藤 和憲 (Ito Kazunori)  
専修大学・商学部・教授  
研究者番号：40176326

(3) 連携研究者

岩田 宏尚 (Iwata Hironao)  
専修大学・経営学部・准教授  
研究者番号：50406360

(4) 連携研究者

岩淵 昭子 (Iwabuchi Akiko)  
東京経営短期大学・経営総合学科・教授  
研究者番号：60310322

(5) 連携研究者

小酒井 正和 (Kozakai Maskazu)  
玉川大学・工学部・准教授  
研究者番号：50337870